



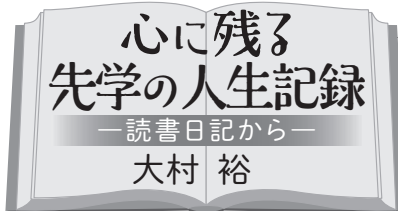
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.201  
2020.6.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第16回

## 『大杉栄自叙伝』

(雪華社 1967年)

無政府主義者・大杉栄(1885~1923年)は、私が私淑している山内清男博士の青少年時代に多大な影響を与えた人物であり、ダーウィンの『種の起源』の翻訳、クロボトキンの『相互扶助論』の翻訳、ファールルの『昆虫記』、『自然科学の話』の翻訳など学術面でも活躍した教養人であった。山内と長年親交を保っていた恩師稲生典太郎先生が、若き日の山内清男の思い出について回想した折(2003年8月取材)、「大杉栄の話題はよく出ていた」「自らアナキストと名乗っていた」などと語っていたことが強く私の印象に残っており、大杉が山内の人格形成・学問に何らかの影響を与えていたのは確実であると思っている。山内がなぜ大杉にあこがれていたのか、その一端をこの「自叙伝」から探してみたいと思う。

大杉は、職業軍人の大杉東の長男として1885年に生まれる。父は温和でかなり勉強熱心であったらしい。帰宅すると自室で「たいがい何か読むか書くかしていた」という。子どもには優しく、大杉は「ちっとも叱られたことがなかった」と回想している。一方、母は勝気で大杉に対してかなり厳しく当たっていた。「母の一日の仕事の主なもの、僕を怒鳴りつけたり打ったりする事」であったという程である。大杉は幼少の頃からどもりであったが、少しでももともと、横っ面を張られるのである。悪さをすると手ではなく、箒でぶたれた。ただし、叱られるのは大杉の方にも原因がある。何もしない犬や猫を見つけ次第殴り殺したり、鉄の棒で喧嘩相手の頭を殴って血だらけにしたりしている。常軌を逸した乱暴である。当然学校でも、度々職員室に呼ばれて叱られている。時々、職員室脇の暗い土蔵に押し込まれたこともあった。しかし単なる問題児ではなく、学業の方は優秀で、尋常小学校一年から高等小学校二年まで、三番より下に落ちたことがなかったと自分で書いている。学校の外でも(高等小学校時代)、英語や数学・漢文を教わりに私塾に通っているし、4~5人の仲間を集めて輪講や演説会や作文の会などを組織している。山内清男等も少年時代に読書会をやっているが、大杉の少年時代と一脈通じるものがある。なお、近くの本屋には、暇があれば遊びに行き色々な本を読み、気に入ったものがあれば「つけ」で買っている。実に向学心旺盛な少年だったのだ。男気もあり、仲間の「虎公」とユリ根を掘ったり、魚を釣ったりしたときは、貧しかった彼に全部上げてしまっていたという。ちなみに、病気で寝ている母を喜ばせるために、ユリの花の方は土産に持って帰ったところ、「根の方を持ってくればいいのにね。ほんとにお前は馬鹿だよ」と言われる。かなり傷ついたはずであるが、大杉は「けれども僕は母が好きだった」と書いている。根は素直で優しい少年だったようである。

中学校に上がると、「講武館」というところに通って柔道を熱心に学ぶ。二十歳前後の屈強な若い衆を手もなく転がし、皆から推されて師範代のような立場になっている。ここでは棒術も教わっており、「棒が一本あれば二人や三人の巡査が抜剣してきたところで敢て恐れないくらいの

自信がある」と豪語している。後年、官憲に対してかなり強気で向き合っているが、腕っぶりには相当の自信があったからであろう。さて、中学2年の時に、陸軍幼年学校を受験して何とか合格。名古屋の幼年学校(全寮制)で過ごすことになる。中学の自由な雰囲気とは対照的に、厳しい拘束がある幼年学校は、大杉にとって耐えがたいものであった。とにかく制服の上衣やズボンのボタンが外れていただけで、日曜日の外出が禁止されてしまうのである。自由を求めてやまない大杉は、教官に反抗ばかりしていたため、学校の成績は訓育(実科)で1番、学科で2番なのに、操行(品行)は下から1番の成績を付けられている。そしてとうとう生徒同士のトラブルに巻き込まれて、敵の生徒からナイフで刺されたことが発覚し、退学処分をくらう。実は大杉もナイフを持っていたのだが、自分がナイフを出したら相手を殺してしまうことを恐れ、素手で立ち向かったところ、減多打ちに刺されてしまったのである。幼年学校を退学後、紆余曲折を経て東京の順天中学校の5年に編入。ここを卒業すると、外国語学校仏語選科に入学することになる。なお中学編入受験準備中に早稲田大学の学生たちの谷中村鉞毒問題に関わる示威運動に接し、社会問題に関心を持つ。そして、この鉞毒問題を継続的に取り上げていた「万朝報」を通じて幸徳秋水や堺利彦の活躍を知る。外国語学校入学後は、幸徳らが創設した平民社に入会し、そこで毎週開かれていた社会主義研究会に参加。社会主義者の道を通ることになるのである。その後は度々逮捕・拘留・下獄を繰り返すことになるのだが、「一犯一語」という崇高な(?)原則を立て、捕まる度に各国語をマスターする(イタリア語・ドイツ語・ロシア語・スペイン語、およびエスペラント)。看守のすきを窺っては本を読むという獄中生活で、拘置所や刑務所は大杉にとって「監獄学校」だったのだ。こうした生活の中で無政府主義に傾斜してゆくのであるが、学術の面では「社会学を自分の専門にしたい」という希望を持つ。「それには、先ず社会を組織する人間の根本的性質を知る為に、生物学の大体に通じたい。次に、人間が人間としての社会生活を営んできた経路を知る為に、人類学ことに比較人類学に進みたい。そして後に(中略)社会学に到達してみたい」と構想するのである。話は前後するが、順天中学時代、丘浅次郎の『進化論講話』を読んで感銘を受け、友人には皆強いるようにしてその一読を勧めたという。「すべてのものは変化するというこの進化論は、まだ僕の心の中に大きな権威として残っていたりんな社会制度の改変を叫ぶ、社会主義の主張の中へ非常にはいり易くさせた」のであった。

ここまで書けば、大杉の問題意識が、本連載第11回(「田中美知太郎『時代と私』」)で紹介した山内清男の少年時代における知的関心に、極めて近いことが理解できるであろう。ちなみに山内は、1920年において社会主義運動から離れる(『画竜点睛』20頁)が、その年は、大杉が本郷曙町から鎌倉に転居した年でもあった(本書巻末「大杉栄略伝」参照)。

※巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

## 目次

■心に残る先学の人生記録 一読書日記から一 (第16回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第194回) 小堀 僚 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました (第13回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「房総の縄文大貝塚 西広貝塚」 忍澤成視 …4

## 考古学の履歴書

## カナダで米寿をむかえました(第13回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

13. カリコ・カンファレンス(1970)と  
モントリオール・カンファレンス(1973)

1970年の初夏6月にカリフォルニアのサンバーナーディノ群立博物館長から思いがけない招待状をいただいた。10月22-25日に同博物館、ペンシルヴァニア大学博物館、L.S.B.リーキー財団の共催で、カリコ遺跡出土の遺物の性格と出土状況に関するカンファレンスを開催しますのでご出席いただけるでしょうかという趣旨だった。リーキー財団の「リーキー」はアフリカのオールドヴァイ渓谷での発掘で有名なルイス・リーキー博士、カリコ遺跡はカリフォルニア州東部にあるモハーヴェ砂漠内の丘陵にある遺跡でサンバーナーディノ博物館のルース・シンプソンが1950年代以来調査していたところ。50,000年以前とされる地層から石器と思われる遺物が多数出土した。アメリカ大陸の最初の住民は約12,000年前にクロヴィス型尖頭器を北米各地に広めた人達だったというのが「定説」になりつつあった当時、新大陸への人類移住はそれよりもっと古いことを示す証拠として挙げられた遺跡の一つだった。リーキーはシンプソンの持参した遺物の一部をみて「これはイケる」と思われたらしく、ナショナル・ジオグラフィック協会から資金を得て、1964年から1972年に亡くなるまで発掘調査に従事された。

手元にある名簿によるとカンファレンスの参加者は同伴者も含めて138名となっているが、私の記憶では会場に集まった人数はそれよりずっと多かったと思う。10月22日夕刻のレジストレーションとカクテルにはじまり、続いて晩餐会とリーキー博士による開会の辞、翌23日はバスツアーで遺跡および遺跡付近の地形の見学をした。24日の午前中は、リーキー、シンプソン、その他関係者による説明、午後は博物館でテーブルに並べられた遺物や関係資料を考察し、そして最終日の25日は午前中いっぱい、総合的議論に充てるという日程だった。最終日の議論の議長をされたのは古人類学者として著名なカリフォルニア大学パークレー校のクラーク・ハウエルで、活発な議論が展開した。カリコの遺物、遺跡に関する論点は日本の「前期旧石器問題」と同様、出土遺物はヒトの作ったものかどうかということ、その出土状況、地質年代の信憑性だった。会場での意見は自然力による破砕だろうという方向に動いていた。会場からホテルに戻るバスの中で隣席のチェスター・チャード博士と「人工品ならパターンがあるはずなのに、それがなくてバラバラだね」といった感想を交わしていた。バスを降りて歩いているときにリーキー博士につかまって「日本の石器と比べてどう思う?」というような質問をされた。大先生を相手に反論を展開する用意はなかったの、何とか言葉を濁して草々に逃げたのだと思う。リーキーの没後もボランティアによる発掘は続いているようだが、最近の教科書類をめくってみたらカリコ遺跡は言及されていないのがほとんどだ。

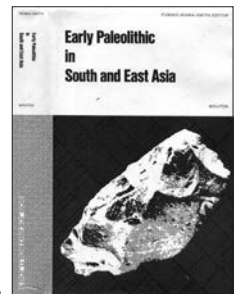
3年後の1973年には私がささやかなカンファレンスを主催することになった。それは1973年の9月1-8日にシカゴで開かれる第9回国際人類学民族学会議に先立って一連のプレ・コンGRESS・カンファレンスを設けようというコンGRESS委員長ソル・タックスの意向をうけて、モントリオールで東アジアの前期旧石器文化に関するカンファレンスをするのを計画し、一年前の1972年夏ころから、資金を申請したり、参加者に連絡をとったりしはじめた。

プレ・コンGRESS・カンファレンスの目的は、近年蓄積した新資料、それにもとずいた新しい観点を15分ほどの口頭発表で言いつばなしにしないで、詳しく検討・論議する場を設けようということなので、現在アジア各地で活躍中の20名ばかりの研究者に発表原稿をあらかじめお送りいただくことをお願いした。集まった原稿をコピーして、カンファレンス前に参加者全員に配布し、質問やコメント

を用意していただくという構想だった。発表者のほかに、アジアの外から見た感想を聴くために、旧石器の型式学的研究で有名なフランソワ・ボルドをフランスからお招きし、私の夫フィリップ・スミスやハーヴァードで院生仲間だったアラン・ブライヤンやビル・アーヴィングなど新大陸の石器時代早期を扱っている人たちにも参加してもらった。テーブルコーダやスライドプロジェクターの操作係として当時13歳の息子ダグラスを動員した。

カナダ政府の人文系研究助成機関であるカナダ・カウンセルとマギル大学から資金が出たので、シカゴ大会直前の8月28日から31日までマギル大学を会場としてカンファレンスを開催した。第一日はジャワ原人関係の論考にあて、午前中はインドネシアから来られたT.ヤコブ博士による人骨出土層の年代測定結果の報告とコーネル大学のトム・ハリソン氏のボルネオと周辺諸島における旧石器研究の報告、なかでもサラワクのニア洞窟でサピエンス人骨が出土したとされる層の約4万年というC<sup>14</sup>年代が論議をよんだ。午後は原人にかかわる文化遺物を戦前から手にかけておられたG.H.R. von ケーニヒスヴァルト博士の論考と1972年から「バジタン文化」に取り組み始めたオランダの若手の研究者J.G.バーツラ博士による概報をきいた。このように午前・午後各2点づつ程度のペースでインド半島から東南アジアの大陸部をカバーしてから北上し、中国、韓国、日本列島、沿海州での研究現状を考察し、さらにアジアの前期旧石器群が新大陸への人類移住に持つ意味にも触れることになった。日本列島については芹沢長介氏から原稿をいただいていたが、ご本人はおいでのいにならなかったところ、シカゴ大会に参加ご予定の大井晴男氏と吉崎昌一氏に、参加していただいて、芹沢氏とは違った見解をのべていただいたのは有意義だったとおもう。最後の日、31日は午前中いっぱいを総括的議論にあてた。主な論点はアジアの前期旧石器文化をどのように性格つけるかということで、意見さまざま。特にボルド博士のご発言が議論を活気あるものとした。

カンファレンスのために用意していただいた原稿をもとにした論文は、第9回国際人類学民族学会議関係の論文を収録したWorld Anthropologyという一連の論文集の一巻としてオランダのMouton社から出版されることになっていた。私どものカンファレンスの論文集はEarly Palaeolithic in South and East Asiaというタイトルになる予定で、ボルド博士にはその冒頭に「はじめに」(“Forward”)と題した短文を書いていただいた。活発な議論の一部は私が編者としての「緒言」の中に書き込んだ。モヴィウス・ライン論の発端となったモヴィウス先生ご自身は、カンファレンスに出席できないことを大変残念がっていられたが、原稿は全部読んでくださったようで、その感想をまとめていただいたのを、「結論」という形で論文集の巻末に収録させていただいた。論文集はMouton社の持ち主が変わったりしたことですいぶん遅れて5年後に出版された。



略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在：神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現：奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学卒業
1953-54年	東京都立大学【現：首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学部研究科(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーヴァード大学人類学部に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師
1967-69年	マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学科 専任教員;2009年以来名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。今回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

## Jレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 194

## 田能遺跡と尼崎市立田能資料館 ～兵庫県尼崎市～ 小堀 僚

今回私が紹介させていただく遺跡は兵庫県尼崎市の田能遺跡です。田能遺跡は昭和40年(1965年)に工業用の配水場建設に伴い発見された弥生時代前期から古墳時代初めにかけての集落遺跡です。昭和44年(1969年)に国史跡に指定され、昭和45年(1970)年に開館した尼崎市立田能資料館とともに史跡公園として整備されています。発掘調査によって多数の墓が発見されており、632個の碧玉製管玉や銅製釧を伴う方形周溝墓は首長クラスの墓ではないかと推定されています。また銅剣鑄型が出土した土坑や住居などに伴う無数の柱穴から、弥生時代の全時期を通して拠点的な集落であったと想定されます。

私は大学院の修士課程を卒業したばかりの1年間だけでしたが、尼崎市立田能資料館に勤務しておりました。田能資料館では出土遺物や、木蓋土壙墓の剥ぎ取りなどを展示しています。私は学生時代に発掘調査の補助員をした経験はありましたが、博物館での業務はほぼ初めての経験でした。田能遺跡は大変川に近く、猪名川の堤防から1本道を隔てた場所に立地しています。配水場がすぐ背後にあり、遠くから眺めると水道関連の施設と見間違えてしまいそうです。しかし、公園の門をくぐると復元された円形住居と高床倉庫が目に入ります。「遺跡に来た」と実感できる瞬間です。後々になり知るようになりますが、私が現在勤務している豊中市を含め近隣市町村のなかで復元住居が存在する遺跡公園は田能遺跡だけです。「遺跡に来た」と実感できる田能遺跡は地域の歴史を学ぶ上でも重要な場所であることがわかります。

春には平日でも小学6年生の社会見学で大賑わいになります。尼崎市内だけでなく、周辺市町村の学校からの見学もかなり多かったと思います。この小学生の見学ですが、火おこしなどの体験事業も行っています。体験事業のひとつに、出土した弥生土器に実際に触れてみるというコーナーもあります。「弥生人と握手してみよう」ということで、壺や甕の頸部内側にあるオサエ痕に子どもたちの指を触れさせてあげます。この業界にいる私たちにとってはコピオサエやナデなどの製作痕が土器にあることは当たり前のことです。しかし、一般の方や子どもたちにとっては「2000年前の人間が実際に残した生々しい指の跡」と感じていただけます。私たちが普段当たり前と感じていることにも、普及啓発に向け発信できるヒントがあるということに気づかされました。

私は勤務した1年間に特別展の企画・運営をさせていただきました。この時感じたことは、どんなにイラスト等で分かりやすいパネルを作っても、ただ展示を眺めてもらうだけでは一般の方



▲田能遺跡と田能資料館(復元住居後方の建物)

に全体内容の2割ほどしか理解していただけないということです。見学している方に改めて展示解説をさせていただくと「そういうことなのか!」と、展示内容や意図を理解していただけた方がたくさんいらっしゃいました。私たちは展示に際して100%のストーリーを用意し提供しているつもりですが、ただ展示を眺めるだけでは、発信度はその程度であるということに認識しなくてはなりません。展示した上で何か工夫を加えなければ、一般の方に向け意図する発信度にはなかなか届かないということです。どちらかというと、体感で得た「驚き」がより記憶に残ります。見学に来る小学生たちも大人になったとき、多くの方が田能遺跡に来たことを忘れてしまうかもしれません。しかし、何かしら「指の跡が生々しかったな」とか「火おこし大変だったな」という体験を記憶してもらうことは、将来的な普及啓発にとって大きな効果になると私は思います。

現在私は埋蔵文化財の学芸員として発掘調査や試掘・確認調査を中心に市内の文化財行政の仕事させていただいています。しかし、豊中市には市が設置する博物館がなく、田能資料館勤務の時に比べ普及啓発事業を担当させていただく機会が減少しました。だからこそ、1年間だけではありましたが、資料館に勤務させていただいた経験はかなり大きかったと実感しています。上記の田能資料館での経験から、市民の方に、「驚き」や体感で感じられるような情報発信を行うよう心掛けるようになりました。例えば遺跡の情報を発信する際も「〇〇遺跡第×次調査では竪穴住居3棟が発見されています。」と説明するよりも「あそこのコンビニを建てる時の調査で、竪穴住居が3棟見つかりました。」と説明した方が、より生々しく生活の中で遺跡を実感できると思うのです。このような観点から私は発掘調査後に建設された建物や施設を指標に市民に説明することが多いです。この取り組みは開発により消滅してしまった遺跡に対しても、市民の記憶や認識として残していくことに繋がればと思っております。特にほとんどの発掘調査された遺跡は史跡公園として残ることがありませんので、なおさら重要になってくると思います。

発掘調査を行っている際も、私の勤務地が市街地であるためか近所の方が調査地前の道でこちらの発掘調査に気づき、興味でたらに立ち止まる様子がよく見られます。その際にただ無視するよりも、挨拶とともに現在の大まかな状況だけでも説明すると、大概の方は感心して聞き入っていただけます。この状況も市民の方にとって「驚き」と「生活感」の中に遺跡を感じる瞬間だと私は思います。昨年担当した調査において、このような積み重ねの結果「現地説明会を開いてほしい」というご意見をたくさんいただくことになり、小規模ではありましたが現地説明会を開催し大勢の方が来場していただきました。

現在コロナウイルスにより自粛期間が続いておりますが、この危機後に普及啓発事業を縮小させてしまってはダメだと私は考えます。自粛期間が明けて元の情勢に落ち着いた際は、地域の文化財や遺跡を維持させていく為にも、以前よりも増して挑んでいくべきではないでしょうか。

## 参考文献:

- 尼崎市教育委員会 2004「田能資料館図録」
  - 尼崎市教育委員会 1982「田能遺跡発掘調査報告書」尼崎市文化財調査報告15
- ※今回のマイ・フェイバレット・サイトは山下大輝さんです。

## 考 古学者の書棚

## 「房総の縄文大貝塚 西広貝塚」シリーズ遺跡を学ぶ80

忍澤成視 著／新泉社(2011)

忍澤 成視

## 1 掘り尽くされた房総の縄文大貝塚

西広貝塚は、房総半島のほぼ中央に位置し、全国でも最も貝塚の分布密度が高い東京湾東岸域に立地する。貝層の分布は直径150mを越え、その規模は当該地域の貝塚群を代表するものと言える。西広貝塚は、上総国分寺を擁することから通称「国分寺台」と呼ばれる広大な台地上の一角に位置する。この台地では、京葉臨海工業地帯の開発に伴って大規模な住宅地が建設されることになり、西広貝塚は遺跡の分布範囲全てが土地区画整理の対象となった。1972年の第1次調査開始から1987年の第7次調査終了まで、断続的な発掘調査によって、遺跡全域がほぼ掘り尽くされた。貝塚は、立地する地形に合わせ、斜面や平坦面に形成され、とくに西側斜面の貝層の厚さは最大2mにも達し、その形状は南西側に開口部をもついわゆる馬蹄形を呈する。発掘調査は、これら貝層の堆積状況の記録と遺物の回収、そして貝層の下部や周辺の遺構調査を主としたもので、「情報の宝庫」と言われる貴重な貝塚資料を漏れなく確保するため、土壌を含む貝層の全てが遺跡から回収されたことは特筆に値する。

## 2 明らかになった大貝塚の「なかみ」

西広貝塚では、整理箱3万7千に及ぶ貝層を採取し、これらを細かいフルイの上で水洗いし、土壌が洗い流された残留物から土器・石器・骨角器などの人工遺物、貝・骨・炭化物などの自然遺物を抽出・分類・集計し、まさに大貝塚の「なかみ」を明らかにした。これらの作業とデータ分析、報告書の刊行までには、実に10年の歳月を要したが、その内容はこの地に暮らした縄文時代の人びとの生活実態を如実に語るものとなった。全国的にも前例のない、大規模貝塚の全面発掘と貝層の全量回収・分析によってもたらされた調査成果は、大貝塚の内容を知るための数少ない貴重な資料であることは間違いない。

## 3 復元された生活の様子

さて、これら貝塚の詳細な分析から何がわかったか。まず食生活の面では、微細な貝類、骨類を含めたその組成から、縄文人の広範な領域におよぶ食糧採取活動と、偏りがなくできるだけリスクを回避した食に対する姿勢を読み取ることができた。貝類・魚類では、鹹水・汽水・淡水と、海岸干潟や河口域、さらに川や沼地のような所にも採集範囲が及んでいる。そして、ハマグリ、クロダイ・スズキなど大型の貝類・魚類ばかりでなく、イボキサゴと呼ばれる直径1~2cmほどの小さな巻貝、イワシやアジなど小魚を多量に採取している。一つの個体は小さくとも、干潟の一部に群生する貝類の採集、海の表層を群れる魚を主対象とした網漁を行っていた。ほ乳類では、イノシシやシカなど大型動物が捕獲される一方、タヌキやウサギ、ネズミといった中・小型動物などを多く捕獲しており、決して「大物狙い」に頼った漁労・狩猟形態ではなかったことがうかがえる。

道具類の面では、漁労・狩猟に関わった石器・骨角器など道具類の組成をとらえることができた。石鏃・石錐・スクレーパーなど小型の石器と、これらの製作に関わった剥片類が多

量に見つかり、さらにこれらと同形態の骨・角・牙製道具が、高い比率で存在することが判明した。骨角器比率の高さは、石材の乏しい房総半島の地域性を示していると思われる。

## 4 多様な装身具と物資交流のようす

貝塚から出土した多量の遺物群のなかで、とりわけ注目されるのが装身具類である。石・土・骨角貝製など、素材の異なる装身具が多量に見つかり、その組成の実態が明らかになった。石製の小さな玉類約100点、土製のペンダントや耳飾り約60点、これに対し骨角製のペンダント類は約500点、さらに貝製の腕輪やペンダント類は約3,200点にも及んだ。貝製品の種類と量の多さは特に注目され、このうちの半数を占めるタカラガイ・イモガイ・ツノガイ類について詳しく調べた結果、これら全てが房総半島南端部の海域からもたらされたものであることがわかった。西広貝塚からは、製品の他に未加工の貝類や製作残骸が多量に出土していることから、集落内で貝製品の生産がおこなわれていたらしい。タカラガイ・イモガイ類は、太平洋側では房総半島を生息北限とするにもかかわらず、加工品は東北各地の遺跡、さらには北海道の遺跡からも見つかっている。南房総産の貴重な貝が、西広貝塚を拠点として各地に送り届けられる姿が見えてきた。その一方で、西広貝塚からは、神津島・信州・北関東産の黒曜石、北陸産の翡翠、伊豆諸島南部産のオオツタノハなど各地の石材や貝が出土しており、房総を代表する多様な物資の流通拠点であったこともわかった。

## 5 ムラにおける場所の意味

大貝塚全域の発掘調査の結果、遺物の発見される場所に特徴があることもわかってきた。西側の厚い斜面貝層からは石器類や骨角貝製品が、東側の平坦面貝層からは比較的かたちの整った土器が多量に出土した。また、ムラの中央広場の一角や西側斜面貝層の端部からは、土偶・石棒など祭祀用具やシカ・イノシシなど獣骨類が多量に見つかった。貝塚における各種遺物の分布は一様ではなく、場所にそれぞれ意味があることを考える必要がある。

## \*お知らせ\*

令和2年6月6日から江戸東京博物館を端緒に全国で開催される「発掘された日本列島2020展」に、西広貝塚出土の骨角貝製装身具の逸品を展示。



## アルカ通信 No.201

発行日 2020年6月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp